

チェーーンジ！！！！

さるとうじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

チエーンジ!!! ※ボデイチエンジではない。

一人の少女が光を求めて目の前の全てを救うヒーローを目指す物語。

目次

プロローグ	1
シロクロ少女	1
雄英体育祭	6
体育祭スタート!!	6
……なんかごめん	10
夢のために行う行動は大体狂氣的	15
キンクリからの白熱した戦い	21
V S 轟	33
残ったモノは	45
職場体験	58
仲良くしよう	58

閑話 職場体験初日	68
ヒーロー殺し	75

プロローグ

シロクロ少女

——英雄^{ヒーロー}

実話や神話など、この名前はそれらの物語の中心人物で数々の偉業を成し遂げた者に与えられていた。しかし、現在ではこれに当てはまらずともヒーローと呼ばれる人達がいる。

——個性の発現

事の始まりは中国の軽慶市、“発光する赤子の誕生”が生まれたというニュース。それ以降さまざまな超常現象が報告され、異能から個性へと呼び名を変えて今日の人々の生活をよくも悪くも変えていった。

先の話の説明するにはこの“悪くも”の部分が重要となっている。
——敵^{ライバル}

手に入れた超常の力を犯罪行為に使う者達。

これらの登場により犯罪件数が爆発的に増えることになった。

荒れていく世を治めるために現れたのが、同じく個性を使い人々を守るヒーローであ

る。

もとはヒーローではなくヴィジランテと呼ばれる自警団だったらしいがヒーローの起源である事に変わりない。^{オリジン}

これらの歴史的背景から個性発現前と異なる、愛や勇気がいらぬ職業としてのヒーローが生まれた。

「今すぐ止まりなさい！ 奪った物を返すんだ！」

「生まれねえし、返さねえよ！ 俺が一生懸命頑張つて奪ったんだ返してたまるか！」
「なっ、ふざけた事言ってるんじゃない!？」

窃盗犯とみられるヴィランとそれを追いかけるヒーロー。

追いかけているヒーローは若手ではあるが世間に認められている実力者である。

そんな男が未だ追いつけないのは窃盗犯の個性によるものだ。

個性“イノシシ”。止まらず真っ直ぐに走り続ける限り速度が上がり続けるこの個性によりヴィランは暴走した列車のように辺りのものを蹴散らしながら進んでいた。

「どけどけえ！ そのガキ！ 死にたくなきやどきやがれえ！」

「しまった!?! 今すぐ逃げるんだ君！」

走り続けるイノシシとなったヴィランの走るコースに入ってしまったのは150セ

ンチ半ばと見える少女だ。

学校に遅刻しそうになっていたのか片手に朝食だったであろうバナナの皮を持ったままで、一見しての印象は白黒。肩まで伸びた髪は中央を境に右側が黒、左側が白で分かれていて、瞳も白と黒のオッドアイとなっている。

突然のことに驚いたのか彼女はヴィランの方を向いたまま立ち止まってしまった。

「ふーおー！ どかねえってんなら死にやが?! ぶつ、ぶへえー!」

少女へ突撃するかと思われた男は衝突の前にバナナの皮を踏み、顔から地面にダイブして情けない悲鳴を上げる。

「何だったんだ？ それと君、怪我は無いか？ 巻き込んでしまつて本当に済まない!」

「あー、大丈夫ですよ！ 驚きましたけどこうゆうのしよっちゆうありますしね!」

ヴィランを拘束し、少女の無事を確認するヒーローの言葉に対して彼女は何故か手に持っていた石ころを捨てた後、*“手ぶら”*の両手を広げて無事をアピールする。

「ん？ 君は雄英の生徒じゃないか。もうすぐ雄英体育祭がある。怪我をしたら大変だったな!」

「ははは、雄英ついても普通科なんですけどね!」

「む？ そうか、それは悪かった。しかし！ 雄英の体育祭はヒーロー科以外も参加でききる。かくいう私も——!」

おそらく母校であろう雄英について語り始めたヒーローだったが、遅刻寸前の彼女は既に立ち去っていたために虚空に向かつて話す姿をネット上にアップロードされ、より知名度を増す事になった。

「いやー、危なかつたあ。危うく朝から大怪我する所だったよ」

「怪我が無いようでも何よりだな。まあ遅刻はしたみたいだが」

雄英高校普通科の教室にて。

先程の話をしていた白黒の少女、とりかえあおい取替葵に逆立っている紫髪が特徴的な少年、しんそろうひとし心操人使が軽く笑みを浮かべて皮肉を混ぜて答える。

「あー、まあ今はヒーロー科じゃ無いし除籍処分とかにならないから大丈夫でしょ」

「……そう言えば今年のヒーロー科は除籍ゼロ。その上ヴィランの襲撃を退けたって話だな」

——雄英でのヴィラン襲撃事件

先日起きたこの事件は雄英教師二名及び生徒二十名が巻き込まれた事件である。

首謀者と見られるヴィラン数人を逃したものの、上記のメンバーに加えて駆けつけたオールマイトとその他の他の教師の活躍で大多数の犯人を捕まえる事が出来たと連日報道

がされている。

「あはは、今年は優秀な人が多いんだね。やっぱり壁は高いみたいだ」

「……でも諦めた訳じゃないよな？ 取替、おまえも体育祭出るんだろ？」

「もちろん！ 私はどうしてもヒーローにならなきゃいけないからね」

「試すような口調で問いかける心操に勢い良く葵が返事をする。

「そうか。じゃあ行くぞ」

「どこに？」

取替の返事を聞くや否や立ち上がり声を掛ける心操へ葵が疑問を向ける。

「ヒーロー科だよ。宣戦布告に行くんだ。混んでるだろうから急いでくれ」

「君そんな事するような人だったっけ!? ってちよつと待つてよ!」

短く返事をしてすたと早歩きでヒーロー科の教室へ向かう心操を葵が追いかける。

……言い忘れていたがこれは一人の少女が苦難を乗り越えて人々を救う真の英雄
“ヒーロー”になる物語である。

雄英体育祭

体育祭スタート!!

私、取替葵の雄英ヒーロー科受験はただただ最悪だったといえる。

私の個性”チェンジ”を説明すると三つの能力に分けられる。

一つ、自分と相手（人でも物でも可）の位置を入れ替える。

二つ、自分以外のもの同士の入替え。これには制限があり、入れ替える対象どちらかに触れている必要がある他に生物同士または無生物同士の入替えで無ければいけない。

また、上記の能力及び三つめも入れ替えを行う対象を認識している必要がある。視覚による認識が最も簡単だが正確に位置を捉えられるならばそれ以外でも構わない。

三つめはぶつちやけ話したくないので割愛するけど受験の結果は不合格。

始めは市街地のような会場でビルから飛び降りて仮想敵のロボットと位置を入れ替えてロボットを落下させてみたけど確実に壊すまでは行かずポイントを横取りされたりと散々だった。

後半になると危なそうな人を助けたりもしたけど結果は奮わず中学三年生の春に届

いたのは不合格の通知。

倍率300倍の難関とは知ってなお挑んだもののやはり涙を流さずにはいられない結果だった。

「敵情視察なんざ意味ねえからどけ。モブ共」

苦い思い出を唐突に思い出したのは雄英ヒーロー科のA組に心操と宣戦布告に来てA組の生徒を見たから。

そばかすの男の子や委員長らしいメガネや少し親近感のわく紅白頭のグツドルツキングガイとか他にもキュートな女の子がいたけど一番印象に残ったのは爆発的な髪の毛。

おそらく今まででも使ってきたのだろうモブという言葉を他者へと向ける天上天下唯我独尊を地で行っていきそうな男。

こういうのを見てしまうとどうしても思ってしまう。

“私のヒーローとしての素質はコイツに劣っていたのか”と。

入試の結果で劣っていたのは確かだし思想や思いの丈が反映されないのも分かっている。だが、私の信じるヒーローとかけ離れた彼を見るとそう思わずにはいられない。

だから、今回の体育祭で証明しなければいけない。私の信じるヒーローが、あの子が

どれほど素晴らしいヒーローであったかを。

「敵情視察? 俺たちは宣戦布告に来たんだよ。油断ばかりしていると俺たちにその場所取って替わられるよ? ……取替、おまえもなんか言えよ」

「へ? ああ!?! 君たちがヒーローを目指して頑張っているのは分かるよ。でも、私も強く想う将来があるんだ。当日はなりふり構わず勝ちに行くから気をつけてね」

考え事をしていたため返事に心操の言葉に反応が遅れたけどここに来るまでに考えていた事をはつきりと告げて教室の前を去る。

「……私はヒーローにならなきゃいけない。何があっても」

真つ白の左目を片手で押さえ、自身に小声でそう言い聞かせながら

「B組に続いて普通科C、D、E組それから——」

体育祭当日、大歓声で迎えられたヒーロー科とは違い普通科やその他の科の登場はひっそりとしたものだ。

「分かってたけど私たち完全に「引き立て役だな」だね」

不満を漏らしていると横から心操が話しかけて来る。

「まあ、別にいいだろ。勝ち上がれば勝手に注目されるんだから」

「うん。そうだね」

話していると体育祭の始まりを告げる選手宣誓が始まる。

「せんせー、俺が一位になる」

「……うわあ」

代表が彼、爆豪勝己である時点嫌な予感はしていたが彼は大勢の人が見るここでも変わらぬようだ。自分を追い込むのは構わないが他に言い方があるだろうに。

彼へのブーイングが収まると、第一種目が障害物競走だと発表される。

「基本何しても良いんだってさ。案外余裕そうだけど心操どうすんの？」

「はは、俺の個性は使えなさそうだから後ろから追わせてもらうよ」

「あっそ、じゃあ先に行ってるね」

『スターアースト!!』

全国の人たちやヒーローの注目を集める雄英体育祭がプレゼントマイクの合図とともに始まった。

……なんかごめん

障害物競走は始め轟焦凍（エンデヴァーの息子らしい）がスタートと同時に地面を凍らせて妨害をしていたが大したものでは無かったためスルー。

ヒーロー科やその他の人たちが着々と進んでいく中で最後尾にいた私だったが

「あ、あれ!？」

「いつの間にか戻って来ちゃってる!？」

「あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！ おれは巨大ロボッつトを通り抜けたと思ったらしいのまにか再び対峙していた。な…何を言っているのかry」

と、まあこんな感じでぼちぼち位置を入れ替えながら進んでいる。

もつと飛ばしても良いが私と相性の悪い個性が居ないとも限らないので個性の使用を思いまくって目立つのは避けたい。手札晒し過ぎイクナイ。

ぶつちやけこの種目で私が困る事は無い。崖が広がっていようと地雷が敷き詰められていようと関係無い。私は他人の開拓した道を使わせてもらうだけだから。

『続々とゴールインだア!! とりまお疲れさん!』

途中で地雷をわざと爆発させてる子がいたけどおそらく一番の子だろう。見かけによらず恐ろしい事を考えるね。

取り敢えず予想通り難所なんてものは無く順位は二十位。予選通過が四十二人なので余裕を持つてのクリア。少し申し訳なくなるね。

順位が発表され終わるとミッドナイトによって次の種目が発表される。何かかな何かな。

「次の種目はコレ！ 騎馬戦よ！」

「……マジか」

いよいよ本格的に申し訳なくなってくる。身に付けたハチマキを奪い合う種目。みんなの私が負けるわけないじゃん。

「私と組んでよ心操」

「……誘ってもらえるのは嬉しいが、いいのか？」

「誰と組んでも結果は変わらないし良いよ。」

私まかせになるのが気が引けるのだろう。心操が「本当にいいのか」と確認をしてくる。

どの道この種目では私の個性さえあれば楽勝勝ちできるので彼は個性を使っても私をチームに引き入れただろう。本気で勝ちに行くとはそういうことだから。

「じゃあ後二人くらい見繕って来てよ。二人でも良いけどその場合心操に肩車してもらうから」

「適当に連れてくるから勘弁してくれ」

結局心操が連れてきた二人を加えて騎馬戦に臨み勝利を手にして最終種目へ足を進めた。

結果？もちろん一位に決まっていますが何か？どや！

サクサクと話を進めているけどしょうがない。本当にサクッと勝っちゃったし苦戦なんて無かったから……

『TIME UP!』 早速順位を見てみよか!! 一位は一千万ポイントを死守した轟

チー……アレエ!? 取替チーム!? 轟チームに近寄って無かったよな!? えーと……

後は二位から爆豪、轟、そして緑谷チームだあ!」

「……………そつ……」

順位発表を聞いて耳を疑った。八百万のおかげで死守した筈の一千万が無く、代わりに手に持っていたのは見覚えの無いハチマキ。

「いつの間に?……彼女は轟くんたちの近くには居なかった筈。遠距離から発動する個性かだとすると、ブツブツブツ——」

「だああ!!? 何取られてんだよ半分野郎!!」

「理不尽すぎやしないか君?!」

周りの喧騒は増すばかりだが何一つとして頭に入つて来ない。

——また一位を取れなかった

この事実ばかりが頭の中を回り続ける。くそ親父を見返し、否定して一番になる事を考えていたにもかかわらず結果は何一つとして奴を見返す事の出来ないものだった。

「どこ行くの轟くん!?!」

「無視してんじゃねエぞオイ!!」

周りの声を無視して依然観客に向けて手を振り続けている女の所へ向かう。

自分と同じ二色の髪にオッドアイ、また先日 of 宣戦布告とやらに来ていた事から普通科だろう。

「おい」

「ん、何かな?」

声をかけると観客に向けていた笑みと同じ笑みをこちらに向けてくる。

「時間切れになった時に俺が持ってた筈のハチマキはお前が持ってた俺の手には知ら

ねえハチマキがあった。多分これお前のだよな？」

「んー、どうだろうね。まあ後で私の順位とすり合わせれば分かるだろうけどさ。もしそうだったら何なの？」

当たり前だが答え合わせはしてくれねえか。だが、おそらくこのハチマキはこいつの物だろう。この事実から個性がある程度推測が出来る。

「交換」おそらくこんな感じの個性だろう。何から何まで交換出来るのかは分からないが攻撃力は無いだろう。

厄介な事があるとすれば人同士の交換が可能な場合。例年通りの一対一の闘いになるならば触れられただけでお仕舞いだ。

「いや、お前の個性はこの際関係ない。ただ俺は次もお前にしてやられる気はねえって事を伝えたかっただけだ」

「ヒーロー科トップクラスの君にそう言われると鼻が高いね。分かった受けて立つよ！まあ、どっちかっていうと私が挑戦者なんだけどね。」

相手が何であろうと構わない。くそ親父を否定するためにも俺はこれ以上負ける訳にはいかない。

再び心に、母の個性に誓って場を後にした。

夢のために行う行動は大体狂氣的

「おつかれー！ とりあえず最終種目まで残れてよかったよかったです」

「そうだな。ところでさつきヒーロー科の奴に話しかけられてたけど何だったんだ」

最終種目発表後、食堂でとりあえず最終種目まで残れた事の祝杯をあげていると心操が質問をして来た。んー、真面目に答えても良いけどちよつとからかってみるか

「なになに私が他の男に話しかけられてるのがそんなに不満だったー？ まあ仕方ないかあ私可愛いからね！」

「……はあ、そういう訳じゃない。好奇心で聞いただけなんだから茶化すなよ」

お？ 可愛いは否定されなかったかー。まあ否定されたらシメたけど。

「ごめんごめんー、まあ話すような事じゃ無いし気にしなくて良いよ。あ!?! そうだちよつと待つててよ良いもん見せてあげるから」

「……おまえが笑顔な時点で嫌な予感しかしないんだが」

むふふ、冷めているように見えてヒーローに憧れている男の子な心操の事だから感性もそこら辺の男と変わらないだろう。特別に何故かさつき小さな男の子から渡されたチアガールの服を来て見せてやろう。

更衣室に行くのが面倒なので個性を使って自分の服とチアの服を入れ替える。なんとこの間僅かコンマ一秒にも満たない。私じやなきや見逃しちゃうね。

「ジャジャーン!! どうどう似合ってる?」

「な、おまえ何でそんな格好してるんだ!?! つーか着替えんの早過ぎるだろ!?!」

チアガール姿になったプリティーな葵ちゃん姿を見せてやると一瞬ポカンとした表情を見せたがスカートをフリフリさせると直ぐに顔を真っ赤にして怒鳴って来た。

「何か知らない男の子から余ったからって貰ったんだよねー。後着替えは個性使った」

「知らねえ男からそんなもん貰ってんじゃねえよ!?! 個性もそんな事に使うんじゃねえ!?!」

真っ赤になっていた彼だったが私の言葉を聞くや否やツツコミを入れてくる。

「うーん、まあ何かの個性が発動したかも知れないから確かにうかつだったなあ」

「そうじゃ無くて……はあ、もういいからさっさと着替え直してこい。もうすぐ俺の試合が始まる」

「はあい」

もうそろそろからかうのはやめておこう。充分いい反応を見れたことだし。

私たち二人は同じクラスの子や他のクラスの人たちからの応援を受けながら会場へと向かう。

私たち二人だけが普通科から最終種目に参加する事になっている。少なくとも思えるかもしれないが十六人の内の二人、さらにはヒーロー科総勢四十名の内の半数以上を押し除けて普通科の人間が参加しているのだ。少ないとは言えないだろう。

彼らは私たちがヒーロー科を押し除けて勝ち進む星となるのを期待しているのだ。

「いやー、期待を受けるっていうのは気持ち良いねえ」

「……プレッシャーになるのがほとんどだと思うが」

確かに期待はプレッシャーになる。本来持たなくていい他人の思いを受け取る事になるから。だけど、私はそれら全てを背負って彼女が目指した頂をこの目で見なければいけない。それが私の強く想う将来だから。

「一回戦頑張りたまえよ？」

「はいはい、ぼちぼち頑張らせて貰いますよ」

「多分だけどき、彼、さっき騎馬戦で使った人たちから聞いてるでしょ。君の個性について」

先程の試合では動く必要が皆無だったため騎馬の二人が試合中に衝撃を受けて個性が解除される事は無かった。しかし、それでも心操に話しかけられた後の記憶が無いという事には気付くだろう。

心操の個性はネタが割れていると途端に不利になってしまうのでもし気付かれています

たら厳しいものになるに違いない。

「あー、どうにかして返事させる必要があるか。まあアイツは単純そうだったし何とかなるだろ」

「まあ頑張りたまえよ心操くん」

彼を送り出した後、私は取っておいた席に向かい彼を応援する事にした。

「ぐっ、アアア！」

『緑谷!! 踏みとどまったあ! だけど足ポロポロで大丈夫かあ!?!』

「……うっそーん」

心操の試合は始めはきわめて順調だった。心操の挑発に乗ってしまった緑谷くんが心操の個性によって停止。

本来ならここで勝ちが決まったようなものだったが、なんと彼は自らの個性を暴発させて片足をポロポロの状態にしてしまった。

正直今回の体育祭で見る彼の行動は異常なものばかり。だが彼も勝つためになり振り構ってられないのだろう。

「ハア！ ハア……！ 個性のつ、解除の仕方が分からなかったけど……足が使えなくなったら止まるだろうと考えてつ、まずは片足でやってみただけで上手く行ったのは本当にラッキーだった」

「っ!? 俺の洗脳が解けたから何だ!? 足が使えなくても俺に勝てるってか?! ああ、そうだよな、その個性があれば小指一つで俺は場外に吹き飛ばされるだろうな！ つくづく羨ましいよ！」

心操の心からの叫びに彼が応える事は無く、彼は心操の方へ向き直る。

片足を失っているため心操が勝つかとも思われたがボロボロの片足を引きずってなお向かって来る彼に押されて最後は肉弾戦となり、そこでヒーロー科と普通科の違いが出た。

いくら片足が使えなくとも彼らは普段の授業で私たちとは違い戦闘の訓練を受けている。これは個性による戦闘だけでは無いだろう。結局無事な足を軸にした彼の背負い投げにより試合は終了。

残念ではあるものの心操は今回の体育祭でその存在を大きくアピールする事が出来た。他の人たちも彼をヒーローを目指す一人の男の子だと認識するはずだ。

「んー、慰めはいらさないよね。彼、男の子だし。何よりそれは他の人で間に合うだろうか」

私の試合は三回戦、上鳴電気くんとの試合になる。

今までの種目では楽して勝って来た私だがここからはそうはいかないだろう。彼の個性は聞くところによると“帯電”。多分だけ体から放出してるのかな。

何にせよ珍しい電気系統の個性で、騎馬戦で一度見たけど地面を伝うほどの電流で尚且つかかなりの範囲だった。

一度使った後はなんていうかアホになっていたけどあれはかなりの人数を感電させるために最大出力で個性を使ったからだろう。一対一では流石にああはならないはずだ。

次の試合に向けて考え事をしていると会場の方から控え室までドンマイコールが聞こえて来る。ここまで言われるつて事は相当ドンマイな負け方をしたのだろう。

何にせよ第二試合が終わった以上私の試合が始まるのでそろそろ会場へ向かわなければいけない。

『ステージの準備が完了したし次の対決!! 心操と同じく目立った動きは無かったが騎馬戦一位! もしかしたらコイツもやばい奴なのか!? 取替葵! 対 パーサス スパーキングキリングボーイ上鳴電気イ!』

よーしいつちよ頑張らせて貰いますか!

キンクリからの白熱した戦い

「うえいうえい、うえーい」

「……は？」

気合を入れて臨んだ第一試合だったが待っていたのは拍子抜けにも程がある試合だった。……いや、これは試合とすら呼べない。

開始早々に上着を投げ上げて自身と位置を入れ替える事で空中に逃げ、上鳴くんの初撃を回避した。やったのはそれだけ。

彼の攻撃はどうやらキャパオーバーする程のものだったらしく、後はアホになった彼を場外へ移動させるだけだった。

『しまらねえ結果だったが取替、二回戦進出だああ！』

消化不良の試合を終えてステージを去り、応援席に向かう途中、曲がり角から声が聞こえてくる。

「いやー、ヤベエよな取替！ ヒーロー科押さえてベスト8だけ？ 普通科の星じゃん！？」

「いや、アイツの個性って確か入れ替えるとかそんなだろ？ そんな個性あつたら今回の体育祭誰でもあそこまで勝ち上がれんだろ。俺はやっぱ相手の電気系の個性のが欲しいね。あつちのが派手だし。」

「あー、まあヒーローって戦ってなんぼだからなー。確かに入れ替えるだけって地味だし攻撃出来ないもんな。あ、でも取替って可愛いしメディア向けで案外いけんじやね？」

「はは、かもな」

聞こえて来たのは二人の男の子の会話で、どうやら私の話をしているらしい。

「ねえ、控え室の場所知らない？ 分からなくて困ってるんだよねー」

「え？ ああ、それなら……え!? 取替!？」

曲がり角から出てきた男の子に話しかける。すると、彼は一瞬戸惑ってから道案内をしようとしたみたいだけど私に気付くと慌て出した。

「えと、あの、ごめん！ ちよつと用事が出来たからやっぱ案内出来ねえわ!」

「お、おい！ ちよつと待てよ!」

「……別にそんなに慌てなくていいのに……」

控え室のドアを乱暴に開けて、置いておいた毛布を上から被り目をつむる。

こうしておく周囲が認識出来なくなり私たちだけの世界になる。本当ならイヤホンでもしたいがアナウンスを聞けなくなるので出来ない。

……別に彼らが間違っているとは思っていない。今回の体育祭で有利だったのは確かだし目立ったところも見せていない。

結局のところ誰の目で見ても分かりやすい活躍が大事になってくるものなんだから。嫌な思考を止めて私はそのまま毛布に包まりながら次の試合が訪れるのを待った。

『二回戦第二試合、ヒーロー一家のエリートの飯田天哉 バーサス 対！ 今大会のダークホース、
取替葵だあ！』

「お互い先程の試合は消化不良だっただろう。この試合では自分の力を出し切り熱いものにしよう!!」

「そうだね。……とところでさ、後学のためにも聞いておきたいんだけど君ってどんなヒーローを目指してるの?」

さっきの試合は聞く暇も無かったが今回は時間が有りそうなので聞く。

「唐突だな!?」 まあいさ、俺の家がヒーロー一家なのは知っているだろう? まだ道の途中だが俺は規律を重んじ、人々を導く兄のような愛されるヒーローになりたいと思っている!!」

「あはは、素敵な答えだね。そんな君とならいい試合になりそうだよ。んじゃ、始めようか」

「ああー!」

私の質問が終わると丁度開始の合図が出て試合が始まる。

この試合だが、前提として彼を一瞬たりとも見逃してはいけない。言わずもがな見失ってしまうと私の個性が発動しなくなるから。そのため接近戦になったとしても個性をポンポン使うのも禁止。

この前提を踏まえた上で私の勝利条件は三つあるのだが、うち一つは見せるのには早すぎるので除外。

一つ目の勝利条件は場外ギリギリで構え彼が突撃してくるのを待つ。

私の個性は入れ替わった後を入れ替わる前と同じ方向、同じ向きを向くので彼を場外に出せる。

二つ目は彼に掌で触れる事。

この場合は彼とそこら辺にいる人を入れ替えて場外に出す。

どちらも簡単に見えるが割と難しい。轟くんのチームにいた（上鳴くんもいたが）彼は私の個性を一部理解しただろうし、さっきの試合でも短くはあるが使ったのでかなりバレーしてもおかしくはない。

加えて一つ目は場外ギリギリに構えるので万が一彼を見失った場合すぐに押し出されて負けてしまう。

と、なると少しキツイけど個性を使用しつつの肉弾戦で彼に触れるのが一番だね。

頭の中で作戦をまとめ終わると先に彼が動き出した。

「自慢の個性は使わなくていいのかな？ それとも必要無い？」

「その言葉には乗らないさ！ 君の個性は厄介だ！ さっきの試合や騎馬戦から判断したがその個性の発動条件は対象を視認するか、触ること、その二つだろう！」

少し挑発を試してみたけど効果なし、か。それに発動条件の触れる方がバレーたのにはちよつと驚いた。

「だから！ なるべく早く君を倒させてもらおう！」

騎馬戦で見せた程の加速では無いが個性による加速で接近してくる。

私との位置を細かく確認している事から今個性を使っても決定打にならないだろう。それにこちらも個性が軽々しく使えない。

もし、接近戦で向かい合っている場合に使うと互いに背を向けた状態になるので相手が視界から居なくなってしまうからだ。相手が慣れてしまったら入れ替わり後、すぐさま私の反応できない速度で移動して蹴られるに違いない。

よつて、使うならばもつと決定打になる時がいい。

「ハアア！ セイツ！」

「うわっ!? つと、危ないなあ。仕返し、つだあ！」

「甘いっ！」

右脚による蹴りを左手でガードし、右手で触れに行くが体を捻った左足の蹴りにより叩き落とされる。

その後も両手主体の攻撃で相手に掴みかかかっていくが彼に触れるには至らない。

「くっ!? うーん、上手くないなあ」

何度か隙を探して触ろうとするが今のところ上手くいっていない。……はあ、ここは一度こちらから攻めていくとしますか。

「フッ！」

彼の足が上がる寸前を見計らって個性を発動し私たちの位置を入れ替える。すると、一瞬の内にして私たちの見ていた景色は変化して、背を向け合った状態になる。

当然ながらタイミングの分かっていた私は即座に振り向き、彼の背中に触れに行く。

「っ!? 個性を使われたか!」

「もらった!」

中途半端な体制で入れ替えたから直ぐに前に避けるのは不可能なはず!

「くっ、うおおおおお!! まだだあつ!」

中途半端な体制だったはずの彼だが蹴り上げようとしていた脚を横蹴りの姿勢に変え、彼の個性“エンジン”を使うことで転がるように私の手を避けた。

「うわっ!? そんなのアリ!」

「っハア……ハア……危な、かった。入れ替わり後すぐに動く心構えでいたがやはり難しいな」

『うおおお!! 第一試合は残念だった二人だが、第二試合は白熱した試合になってるぜ! イエエアアア!! ……というか取替、近接戦闘も出来たのかあ!?! イレイザーはどう思うよ!』

『まあ、アイツに触れられたら終わりな以上飯田の奴が満足に戦えてないのもあるが……それでも飯田相手にここまでやれてんのは正直驚いたな。』

熱気を帯びていく会場とは反対に思考がクリアになつていく。

一つ目の作戦が通じなかったのは痛い。だけど、相手を場外に送り出すための次の策を成功させるため、雑念を捨てて心を研ぎ澄ます。

履いていた靴二足ともを彼に向けて飛ばして片方と入れ替わり、接近して蹴る。反撃を避ける為に今度はもう片方の靴と入れ替わり、彼が振り返ったタイミングで元の靴の方へ入れ替わり背後を取る。

「くっ、しまった!? こうなったら……」

私を完全に見失った彼は回転蹴りで私を捉えようとするが私の方が速い。このまま触ったらミッドナイト先生辺りと入れ替えて……

「レシプロ……バースト!!」

「っ!? くっ、あああ!?!」

飛んできていた蹴りが急加速し、見えていた景色が突如として変わる。

彼の蹴りによって私は地面に叩きつけられ、何メートルか吹き飛んでしまったらしい。幸い場外ギリギリで踏み止まったものの出血が酷いのかフラフラだ。

「ああ、くそっ! 痛つてえなあ!?!」

立ち上がりながら声を荒げる。叩きつけられる時に腕をクッションにして頭を守らなかつたら立ち上がる事も出来なかつただろう。

「意外と口が悪いな!?! ふう……悪いが頭を蹴らせて貰った。立ち上がるのもやつとだろう。大人しく降参してくれないか?」

「……は? 降参? まだ負けてないのにする訳ねえじゃん!」

「……そうか、済まなかった。君にそこまでの覚悟があるのなら全力で終わらせよう！」
先程のクリアな状態と真逆で全身が燃えるように熱い。……正直ここで奥の手を出すつもりは無かったしなんなら出さなくて済むなら出すつもりは無かった。しかし、もうここまで追い詰められた以上そうは言つてられない。

真つ直ぐ向かつてくる彼から目を離さない。極限まで彼が近づいて来るのを待つて、待つて、待つて。

「今っ！」

彼と私の位置を入れ替える。

今、私の視界に彼はいない。しかし、私は彼がさつきまで私がいた所にいるのを私は知っている。よつて、私の個性の一つ目の能力の発動条件の対象の位置の認識が出来る。

再び個性を発動して私たちの位置の入れ替えをする。すると、私が仕掛けて来ると理解し、振り返つていた彼は今、私の目ので背を向けている状態になる。

「なつ、個性の発動が早すぎる!? 見なくても発動できたのか!？」

「まあーねっ!」

さつきと同じように彼の背中に触れに行く。彼もさつきと同じように右脚で反撃しようとしているが意味がない。何故なら今彼の右脚の個性は使えないから。

「っ!? 何故!?!」

「今度こそ!」

ぼんつ、と触れた後ステージにいたのは私とミッドナイト先生で、飯田くんは場外に立っていた。

「つついよっしやあ!!」

「えーと……飯田くん場外! 取替ちゃん三回戦進出!!」

私が勝利した事に喜んでいると、唐突に入れ替わった事で呆然としていたミッドナイト先生が飯田くんが場外にいる事を理解したらしく試合の終了を告げてくれた。

「ナイスガッツだったなあの子!」

「勝った方がボロボロで負けた方が無傷か。それとあの個性はヴィラン退治には使えなさうだな」

「いやいや、確かに一人では戦えないけどサイドキックとしてサポートに徹すれば優秀だし何より目の前の人を確実に助けられるのはデカイよ」

「さすが雄英、ヒーロー科以外にも良い個性がいるもんだな」

出血によりぼーつとしている状態ではあるけど、試合終了後に多くの人が私に、私たちに拍手を送ってくれたのに気付けた。

ふらふらになりながらも手を振り返している私に飯田くんが近づいて来た。

「取替くん。俺にとつてこの敗北は言い表せない程悔しい。だが！ この試合はとても白熱した素晴らしいものだった。思わず俺も熱くなつてしまふ程に。勝手な事を言うが君にはこの先も頑張つて欲しい」

「もちろん！ ！こここまで来たからには勝つてやりますよ！」

「唐突に口が悪くなつたが戻るのも早いな!？」

飯田くんに別れを告げた後は保健室に向かう。

我慢していたけどかなりヤヴァイ。痛い。長男じゃないので辛い耐えられない。

「チュー……！ ……はい、終わったよ。」

「ありがとうございませすリカバリーガール。いやー、結構危なかつたですなー。ふらふらでしたよー」

「そう思うんなら観客に手なんか振つてないでもつと早く来るこつたね。それといいかい？ 流れた血が戻つた訳じゃ無いからあんまり血を流すとすぐ倒れるからね？」

「はぁーい」

ベッドから起き上がりスマホを見る。何人かの友達がお祝いの言葉とか心配の言葉

を送って来ていた。

「……あ、心操も送って来てる」

心操が連絡をしてくるのは珍しいのでワクワクしながらメッセージを開いてみる。が、パツと出て来たのはトーナメント表。

「むうー！　なんだよあいつう、私がこんなに頑張ってるのにドライ過ぎんだろお！

てかやつぱり次の相手轟くんか」

リカバリーガールに怒鳴られるくらいベッドでジタバタしていると、ピロリンという音とともに新しいメッセージが来た。

心操『まあ、次も頑張れ』

「……はは、言われなくても頑張るっつーの！」

ある程度元気になったので再び控え室に戻るに行こうとしたけど曲がり角で人とぶつかってしまふ。

「わっ!?　すいません」

「……こちらこそ済まない。怪我はないか？」

「あー、大丈夫ですよ……て、エンデヴァー!?!」

……マジか、マジかあ

VS轟

「君は……次の焦凍の対戦相手だったな」

「あー、はいそうです。じゃあ私もうすぐ試合なので……」

「まあ待て。話しがある。心配しなくても時間は取らせん」

威圧感がばないので退散しようとしたが引き留められる。

話したい事がある。そうは言われたものの嫌な予感しかしい。

「何でしょうか？ あなた程の人が気にするような事私には無いと思うんですけど」

「単刀直入に言う。卒業後、俺の事務所に来い」

……驚いた。まさかN.O. 2からの誘いがあるとは。

「あの、一応言っておきますけど私ヒーロー科じゃないんですけど」

「体育祭でベスト4という結果だ。編入など決まったようなものだろう。」

「……まだ試合終わってないんですけど」

私が次の試合で負けると言わんばかりの言い方にカチンと来る。

「結果など分かり切っている。焦凍はオールマイトを、N.O. 1を越えるために作った仔だ。こんな所で負けるなどあつてはならない。大体君をウチに入れたいのは焦凍を

サポートさせるという目的あつてのものだ」

エンデヴアーは私の言葉に当然だ、と返した後に轟くんをオールマイトを越える為に使った事、私を事務所に誘ったのは彼のサポートをさせる為だと語り出した。

「お前のサポートがあればヴィランとの戦闘だけでなく救助活動での負担をかなり減らす事もできる」

うーん、轟くんのサポートをさせたい、か。

親として轟くんの気を遣っているように思える発言だけどどうなんだろうか。

「む、少し長くなつたか。まあ何にせよ使える個性を持って生まれた事を誇るといい。この俺の目に止まったのだからな」

「……一つ、言わせて貰います」

「何だ？」

No. 2からの誘い。

ヒーローという職業で生計を立てるなら当然乗った方がいいだろう。だけど……

「今の話ですけどお断りさせて頂きます」

「何？ 理由を聞かせて貰おうか」

私の返事に対し、エンデヴアーは少し声を低くして理由を尋ねてくる。

当然断る理由はちゃんとある。

「私が目指すのは目の前の全てを救う最高のヒーローです。これを目指す以上私だってトップを目指します。だから、私は誰かのサポートに回ったままになるつもりはありません」

「その個性でトップか。随分と大きく出たものだ……ふん、時間を無駄にしたか」

「はあーっ」

エンデヴァーが去った後に思わずため息をつく。頬が引き攣っているのも分かる。

ヤバイなあ。No. 2に啖呵きってしまった気がするけど大丈夫だろうか。

それに加えて前の試合の疲れが抜けてないせいで疲労感がマックス。

笑顔を保とうとしてみるけど頬が引き攣っている。

「むー、頑張らねば。笑顔が素敵な私は今日も頑張りますよーっ」と

頬の筋肉をほぐしながらステージへ向かう。女の子は笑顔の方が可愛いからね。維持するのが大変でも仕方ない。

「……来たか。さっきの借りは返させてもらおうからな」

ステージに着くと既に轟くんが来ていた。

「そーいやさっき君のお父さんに会ったよ」

私がそう言うのと彼は眉を顰めて舌打ちをする。

あー、父親の話題は地雷みたいだね。

「チツ、あのクソ親父になんか言われたか?」

「うん? まあ、大した事じゃないんだけど息子自慢的なものだったよ。もしかして、エ
ンデヴァーって親バカ?」

微妙な気がするがさっきの試合でも轟くんが炎出した時には大興奮だったらしいし
案外不器用なだけだったりして。

「……ねえな。子供なんて道具としか見てないクソ親父だ」

「そっか、大変だね。親に恵まれないのはとても不幸な事だ」

何度か言葉を交わした後、定位置につく。

今までの試合と同じように轟くんはスタートと同時に氷結攻撃を繰り出して来るだ
ろう。

氷か炎

そうこう考えている内に開始の合図がされ試合が始まる。

——ドドドドド!!

まあ、予想通りの攻撃が来たね。

「よい、しよつとっ！」

スタートの合図とともに爆音を立てて迫り来る氷結を轟くと位置を入れ替える事で避ける。

取り敢えず当面は個性を使用させ続けての消耗を狙う。

どんぐらい彼の個性が持つのかは知らないけど流星に私の個性ほど燃費が良くないと信じた。

初撃と同じように何度も迫って来る氷を避けて行く。

「はあ……はあ……けつ、こつ辛いなあ。全然近づける気がしない」

氷結攻撃自体はさっきのように避けられるものの攻撃範囲が広すぎて近づけない。

何より前の試合で若干貧血を起こしていた為に今の私はふらふらだ。

このままで轟くんのガス欠が来たところで勝つのは難しいかもしれない。

「ちよこまかと動きまわりやがって……」

「それは悪かったね。こつちはこれで限界、なんだよ」

迫り来る氷を全て避けきれてはいるものの、私は超パワーを持たないので氷の破壊が出来ず逃げ場が減って行く。

それに加えて彼の個性の影響で下がり続ける体温のせいで身体が悲鳴を上げている。おそらく今、轟くと位置を入れ替えても彼が今いる場所の冷気に耐えられ無いだろう。

「チツ、仕方ないなあ」

あんまり使いたく無いけどさっきの試合で使ったし、まあいいか。

テレビに映るから正直見せたく無いんだけどそうは言ってられないしね。

「そろそろ終わらせる」

——ゴゴゴゴゴゴオ!!!

その言葉とともに今までで一番の攻撃が迫るが関係ない。

だって、この攻撃は私の所に来るまでに止まるから。

『ん？ んんんん？ 取替に迫っていた氷が途中で止まってるう？！ 一体何なん

だあ!?!』

『そつちじやねえ。轟と取替を見ろマイク』

『ハイハイ分かったよイレイザーって……えええええ!! 轟と取替の右半身が入れ替

わってるー!?!』

あはは、私の個性の最後の能力に会場騒然っ！ てね。

私の個性の最後の能力。

出来る事と言えば相手の身体と自分の身体の一部を取り替える事。

一度で取り替えれる限界は身体の体積のおよそ半分まで。

今回は彼の個性が半分ずつに分かれていたので右側の氷を封印する事に成功した。まあ、手とかから個性を発動したりするのも有効だったりするんだけどね。

「てめえ……さつき飯田の試合で使ったのはコレか」

「そーそ。一瞬だったから注意してなきゃ気が付かないだろうけど私の足と彼の足を取り替えたんだよね」

本当にさつきの試合は大変だった。

私は別に格闘のプロフェッショナルとかじゃ無いので飯田くんみたいにヒーロー一家で幼い頃から訓練してて肉弾戦が得意だと容易に触れる事すら出来なくて困る。

「でもさ、安心して良いよ。個性って炎の個性を持つ人には炎に耐性を、氷の個性には氷に耐性をつけて感じである程度使用者の命を守るように出来てるじゃん？」

稀に自分の個性で傷つく人もいるけど殆どがそうだろう。

「それがこの個性にもあつてね。身体の一部を変えた時に血液は変質、個性因子は一時停止するんだ。だから身体を半分取り替えたからって私は君の個性を使えないし君も使えない」

「チツ、やっぱ親父に俺の個性使わせるように頼まれたんじゃないのか？」

「そんなんじゃないよ。勝つ為にやっただけ。そんな事より私、かなり限界に近いしとつとと決着にしようか」

左側の髪につけていたピン留めを外して投げ、彼の所にワープする。

私と轟くんの身長差が二十センチくらいあったので左右のバランスが悪く、上手く走れないのでこうするしかない。

「くっ!?!」

「決着を着けるって言ったけどさー。流石に左使って抵抗した貫わないと困るんだけど」

流石にここまでしたらもう片方の個性を使うと思ってたけど無理か。

轟くんは目の前にワープしてきた私の手を転がるようにして右に避けた。

「はあ……くそつ、私だつてこの能力あんまり使ってたくないし左使わないんだつたら早く負けてくれないかな?」

この能力を使ってる内はずっと個性の使用判定が出ているのでさっきの試合で軽い脳震盪を起こしていた私には結構辛い。

それに見た目が復元失敗した化石みたいな見た目になるので本当に好きじゃ無い。

「クソッ」

「……………これは」

かなり挑発してみたけど轟くんは左の個性を使わずに私の右目側の視界の方へバランスの悪い両足を器用に動かして走り出した。

む、どうやら私の右側から攻めることで私の個性の発動を防ごうとしてるみたいだね。

左を使わないのは不満だけど諦めてないようで良かったよ。

「ふっ、セイツ！」

「っ!? く、があっ! お、らあ!」

「つてえ!」

近づいて来た轟くんに対し左手によるフェイントを掛けて右の拳で彼の顔面を打ち抜く。

私の左手を避けるしか無い彼はフェイントに引っ掛かりもろに喰らったが踏み止まってカウンターを決めて来た。

何度か左手で勝負を決めに行こうとしたけど上手いこと彼は避け続けた為、最終的にはただの殴り合いに発展して行った。

『おおっと何だか殴り合いの喧嘩みたくなつて来たぞー!? てか轟容赦ねえー顔面カウンターだ!』

『まあ殴ったの自分の顔だし良いんじゃないかね。……轟の奴まだ迷ってるのか』

「はあ……はあ……」

頭がガンガンする。

身体が寒い。

いつ倒れてもおかしく無い。

はは、とつとと決着にしようって言ったのに私の方が限界が近いね。

誰かの声援が聞こえるものの耳に入ってこない。

おそらく次の激突が最後になるだろう。

私は上着を脱いで個性を発動して攻撃を仕掛け、彼は拳を構えて私を迎え撃つ。

「うおおおおおおお!!」

『白熱の準決勝、遂に決着だああ!!』

『互いに殴り合って迎えたのは静かなる決着!! 取替はステージ上でダウン! 轟は場外で棒立ち! ……あー、コレってどうなんだ?』

『引き分けってどこか。最後の激突で取替は轟の一撃を食らってダウン。それと同タイミングで轟も取替の個性で場外ってどこか。おそらく取替が最後に個性を解除して右手で個性を発動させたんだろうな』

「……引き分けか」

取替との試合、さっきの試合で生まれた迷いを引き摺ったまま挑んだがあいつの個性で氷が使えなくなっても尚、俺は左を使う事に踏ん切れなかった。

いや、自身の個性が忌むべきものだけになった事で余計親父の事を忘れる事が出来なかった。

それに、あいつと一つになった時感じた俺の身に残る憎悪と全く身に覚えの無い別の憎悪や怒り、絶望。多分あれはあいつの――

「轟くん、ちよつと良いかしら?」

「ミッドナイト先生……」

「次の決勝なんだけど轟くんが出てくれないかしら?」

「……あいつはどうなるんですか?」

確かに俺の方が傷は少ない。リカバリーガールの治癒を受ければ試合には出られるだろう。

だが、それで良いんだろうか？ 本気で戦ったあいつじゃなく俺が出る事は許されるのだろうか。

「そうね。結果は引き分けだから同率二位になるわ。彼女と、決勝で負けた人が二位になるわ。ただ、彼女はもう戦えないだろうからあなたに出て欲しいの」

「分かり、ました」

納得いかないがそう言われては仕方がない。取り敢えずリカバリーガールに治療してもらおうついでに取替を保健室に運び、次の試合を待つ事にした。

残ったモノは

「私ね、目の前の人全てを助けられるヒーローになりたいんだ。

一人じゃ無理かも知れないけどきつと葵とならなれるからさ。

これからも一緒に頑張ろうね！ 葵！」

ああ、これは夢だ。考えるまでもない。

今の私に世界がこんなに綺麗に見える筈が無い。

それに、目の前にいる少女が私に微笑んでくれる事などもう無いのだから。

——禍福は糾える縄の如し

良い事も悪い事も入れ替わり起きていく。

同じ夢を見続ける事なんてあり得ない。

そんな大人にならなくても分かるような事をあの頃の私は分かっていたいなかった。

私の両親は異形系の個性の持ち主だった。

二人で仲良くヒーローをしていきたいらしい。

らしい、というの私が両親のヒーロー活動を見た事が無いから。

そんな両親も私が生まれた時はそりやー二人とも見事に困惑。

真つ黒の髪に瞳で異形の欠片の無い普通の子供で両親に一切似ていないからね。

色々あつたけど議論の末、五歳頃になつたら変身系の個性として出るだろうという事でまとまつた。

ただ発覚した私の個性は異形系では無かつた。

これを知つた父は大激怒。母にとんでもない形相で問い詰めた。まあ、母も当然身に覚えがないので烈火の勢いで言い返す。

こうなると止まらないもんで両親がいる間私の家は罵声が飛び交う家になつた。

……まあ、ここまでだつたらありきたりな物語で珍しくない。

珍しいのはここからで半年後、状況は私にとってさらに悪い方向へ進んで行つた。

——赤子の取り換え

この情報が病院から入つて来た。

信じられない事に母体の中にいた時に既に赤子が入れ替わつていたとの事。

……まあ、分かるとは思うけど犯人は私だつた。

私は珍しい事に生まれた時から個性が発現していたらしい。

赤子だつた私の個性の暴走によって今回のことが起きたのだろう。そう、医者の人が言つていたのをよく覚えている。

何はともあれ母の不貞疑惑が晴れて一件落着、とは行かずに両親二人の矛先の向きが私の方へ向いただけだった。

「お前さえ！ お前さえ生まれ来なければ!!」

「アンタの！ アンタのせいで私たち仲が悪くなつたのよ!! どう責任とつてくれるの!? 娘でもないのに家にいるなんて気持ち悪い!! 出て行って!!」

こうして二人の罵声を突然浴びせられ、物を投げつけられるようになった私。

ただ、なんとまあその頃の私は馬鹿で愚図だったので元凶は自分にも関わらず何故、どうして、と言った具合にひたすら両親を憎んだ。

この頃から一人になった私は自分を守る為に、私の為だけに個性を使うようになっていた。

そんなこんなで七歳にして擦れ切った私だったけどここで変化が起きる。

両親、いや私を育ててくれたあの人たちは私と入れ替わった本当の子供を取り替えるように役所に訴え、見事受理された。

役所の人たちは最初こそ渋っていたけど一切血の繋がっていない上に望んでいない子供と私の個性のせいで不幸になった被害者だった彼等の訴えは双方の親の同意で認められた。

私がどんなふうに育てられているかも知っていたのかもしれない。

例の無い珍しい事件だったもんでニュースで報道されたりしたけどそんな事は私にはどうでもよかった。

新しい家でもどうせ今までと同じ扱いだろう。そう思ってた先で私は初めて私にとつての光を見つける事になる。

「わたしは取替花！ よろしくね！ ねえねえ、あなた名前は？」

「……葵」

「葵！ じゃあ今日からあなたは取替葵ちゃんだね！ えへへ！ わたしたち顔もそっくりでみょうじもおそろいだね！」

「……」

花は本来私と双子として生まれる予定だったらしく私そっくりの顔で真っ白の髪と瞳が特徴的な笑顔の眩しい女の子だった。

花の家庭は母子家庭で常に母親が仕事に出向いていた。

普段、母親に構ってもらえない花だったけど私なんかよりよっぽど愛とか真心みたいなモノを持っていた。

「あー！ 葵またケンカしてたんでしょー！ ぼうりよくはダメって言ったじゃん！」

「……アンタにはかんけー無いでしょ。大体アイツらがくだらないことでケンカ売ってくるから」

「もんどーむよー！　うりゃー！」

「わ!?　や、やめろ！　はなれるお!!」

この頃の私は夜落ち着いて寝る事が出来ていなかった。学校での休み時間はいつも机に突っ伏したまま寝っぱなし。

心配して話しかけて来た子たちも何人かいたけど全て無視して関わらずに過ごして来た。

私はそんな態度が気に入らないって子供たちと喧嘩ばかりしていた。

私の個性は自分一人を守る分には強力で、何より生まれた時から個性が発現していた。私が喧嘩で負ける事は無かったけど花はいつもそんな私を心配して本気で説教をして来た。

産みの親から離れ、私は自身の上ってしまった事に気づき始めていた。

両親も、自分を心配してくれる花もその弟も、全て不幸にしたのは私なのではないかと。

だからこそ私は自分の側に誰にも近づけたくなかった。不幸にさせたくなかった。

私の意思もあって花との距離が中々縮まらなかったけど、高学年の子たちとの喧嘩に花が混ざって来てから彼女との関係が変わり出した。

「はあ……はあ……暴力はダメって言ってなかったっけ？」

「むー！ 今のは別。葵、さっきのはあの子たちにいじめられてた子を助けるためにしたんだよね？」

「……別に、目があつて文句あんなのかつてからまれたからやっただけ」

「もー！ すぐそう言う！ ……まあさ、やり過ぎは良くないけど人を守るためにする事をダメだとか悪いなんて私は言えないよ」

花はとても真つ直ぐで、人を助けるために力を正しく使えるヒーローだった。

そんな花の次の言葉で私の人生は大きく変わる事になった。

「ねえ！ そんなに強いならわたしとヒーローにならない？」

「……なんで」

「わたし、葵とならたくさんの人を助けられると思うんだよね。……それにきつとたくさん人を助けたら葵が笑つてるところもっと見られるかなー、なんて思つてたり」

私の笑顔が見たい。

そう言つた彼女の笑顔が眩しくて、思わず私は目を逸らしてしまった。

「……変なの。私の顔アンタの顔と一緒にじゃん」

「ぜんっぜんちがうよおー。いつもクールな葵が笑うからこそ意味があるんだよ！

ギャップだよギャップ！」

「私と関わると不幸になるよ」

「わたしは葵の笑顔が見れたら幸せになれるよ？　いつしよにいなきや見れないじゃん」

「……そう」

私と一緒に居たい。

私の笑顔が見たい。

この時、私の笑顔で幸せになれると言ってくれた彼女の言葉はこの時の私の心を溶かすきつかけを作るには十分だった。

「うししー　わたしたち二人いつしよならきつとサイコーのヒーローになれるよー」

そこからは毎日私の人生で一番楽しかった日が更新されて行く素晴らしい日々だった。

中々素直になれないで冷たく当たっていた私だったけど次第に花の笑顔に心を開くようになった。

街で困っている人を見かけたら助けて、虐められている子や喧嘩している子がいたら二人で止めに行ったりもした。

私と花の息はびったりで私には見るまでもなく彼女の場所が認識出来たし、彼女も私が手を差し伸ばしてくるタイミングが分かっていた。

この時には私の個性は私だけを守るものじゃなくなっていた。

「……禍福は糾える縄の如し」

「んー？ なにそれ？」

「前に本で見た言葉。悪い事が続く事は無いって意味なんだけど本当なんだなって思つて」

「へえー良い言葉だねっ……て、あー!? 今、笑つた!? ねえねえもつかい！ もつかいほら笑つてー!」

「こ、こんな顔でいいならいつでも見せてあげるけどちよつと今はヤメテ」

小学校六年生になってすっかり仲が良くなった私たちは近所でも評判になる程で、何をするにもいつも一緒だった。

幸せな時間だった。

夢のような時間を過ごした。

いつまでも一緒に居られるような気さえしていた。

「ちえー、しょうがないなあ。でも最近葵が笑うようになって学校にも溶け込めてきて私は嬉しいよ」

——何度も言うけどそんな事心配しなくていいって。私は別に花がいれば十分だし「ダメだよー!」私の相方が学生時代ぼっちでしたなんて格好つかないじゃんさ! いったい友達は何で作つてよ。ほらプルスウルトラあー!」

——雄英高校の校訓だっけ？ ていうかそんな事でいちいち更に向こうへー、なんて言わないでよ

「知ってたんだー。この前調べただけど気に入っちゃったんだよねー。自分たちが通う高校の校訓ぐらい覚えとかなくちゃ！」

——中学生になつてもいないのに気が早いよ

「ふーん、ヒーロー科最高峰の学校に行こうとしてるのに無理だ、とか言わないんだねえー」

——最高のヒーローになるんならそりゃ通過点としてあるでしょ。まあ私たち二人なら最強だし何とかなるよ

「ふふ、そうだね！ 頑張りましょー！」

将来の事で浮かれていた私だったけど僅か数日後に思い知る事になった。

良い事の次は悪い事。

どれほど強く思う将来があつてもそれを叶えられなくする理不尽はいつでも起こりうるって事を。

「くそっ！ 消防隊はまだか！」

「ヒーローは!!? ヒーローは来たのか!? あつちでヴィランが暴れてんだぞ!!」

「ヒーローならさつき来てただろうが！ それにあんなデカい怪物が近くで暴れてんの
に消防隊が来れるか！」

「ゴオーゴオーと燃え盛る火の音に人々の怒声、それに建物が崩壊していく音が聞こえる。」

「くっ、はあ……はあ……この、どけえ！」

「葬!?! そこにいるの！」

殆どの人が眠り、明日を待つ夜に事件悪夢は起きた。

暴れ回った巨大なヴィランと駆けつけたヒーローによる戦闘で起きた民家の崩壊に
火事。

その最悪に巻き込まれた私は体の左半身を潰された。

個性で自分の上に乗っかっていた物をすぐに動かす事が出来たものの私は既に限界だった。

「……花、花は無事なの？」

「……はは、無事、とは言えないかな」

花の声がする方に何とか目を向けた私だったけどそこには右腕を失った彼女花の姿があった。

「花!? 私のことはいいから今すぐ此処を離れて！」

「……ねえ葵? 私今からとっても自分勝手な事するけど怒らないでね」

「花? 何言ってるの?」

花は軽く笑みを浮かべて私の方へ足を引き摺りながら近づいて座り、私のぐちゃぐちゃになった左側に触れて喋り出した。

「私ね、初めてあなたに会うとき本当は文句を言うつもりだったんだ。私の弟をどうして取ったんだーってね。」

でもさ、いざ会ってみたら私と同じ顔でとても悲しそうな顔をしてるもんだから何かしなきゃって方が強くなったんだよね」

「私、葵と会ってからは本当に楽しかったよ。お父さんとお母さんに構ってもらえないのは寂しかったけど憧れてた姉妹っぽい事沢山できたしね。例えば……喧嘩とか。」

それに、一人で目指してた夢が二人のものになったからね」

「それから……つてもう時間がなさそうだね。最後に言うけど私、やっぱり葬にはヒーローになって沢山の人に囲まれて笑ってて欲しい。」

だから、私の身体を葬にあげるよ」

「……は？　ちよつと待て！　オイ！　何言つてんだよ花！　そんな事できる訳無いだろ！

……大体花の弟の事だつて私の事だつて全部悪いのは私だろ！　私なんかよりも花の方がヒーローに相応しいにきまつてる！

私は花つていうヒーローから光を貰っただけなんだ！

だから花！　今すぐ手当てを受けて、いや、花が私の身体を……」

「私は葵のヒーローになれただけで十分だよ。それに大丈夫！　これからも私はいる、私たちは二人一緒だよ。だから——」

「待てよ！　花！　花あ!!」

「君！ 大丈夫か!?! 今すぐ手当てを……っ!? その子は……そうか、だが今は——」
「……………」

潰れた筈の左目に映る長い白髪。

半身が潰れ、腕を失っている花の死体。

あまりにも理不尽な死に私の光はここで失われた。

以来、私は真つ暗な道を光を求めて歩んでいる。

職場体験

仲良くしよう

「はあー……うん、まあ最高で最悪な夢だったし今日の気分は五十点でとこか」

忘れてはいけない記憶だとしても夢は夢で同じ同じモノを毎日見続けるなんて事は無い。

だからこの夢に悩まされる事もないし今更何か想うことも無い。どうせこの夢を見たことすら忘れるのだろう。

かいた汗をシャワーで軽く流してから制服に袖を通し、買い溜めしておいたパンを口に放り込む。食欲は無いけど体に身についた習慣として詰め込む。

食事中つけていたテレビ番組では流行の食べ物だとか今季のおすすめスポットとかどうでもいい事を紹介していた。一瞬気を惹いたのは星座占いだろうか。まあ、今日気分と同じで可もなく不可もなくといった感じだったのですぐに興味を失ったけど。

最後に制服を着て、多少身嗜みを整えてから鏡の前で笑顔を作る。

「よし！ 今日も一日頑張ろー！」

体育祭が終わってからは街を歩いたときに声を掛けられたけど数日経った今では多少

落ち着いて今まで通りの登校になってる。

ただ今日は、いや今日からは今まで通りとは違う。

普通科を通り過ぎてホームルーム中のヒーロー科の教室へ入る。よし、

「おはようございまーす!!」

「……………へ?」

気合を入れて挨拶をした先にいたのは呆けた顔したヒーロー科一年A組の人達。

あれ? 何か変な反応だな。

「あ、あの相澤先生。何で普通科の人が?」

「ん、そういうや言ってなかったな。そこにいる取替は今日からウチのクラスの生徒になる。まあ、編入ってやつだ」

やつば言ってなかったのか。A組の一人達は呆けた顔から驚いた顔になってる。忙しそうな表情筋だね。

「「ええええええええええ!!」」

「可愛い女子! 可愛い女子! 可愛い女子が来たぞー!」

「編入!? ていうか毎度話が唐突過ぎませんか!」

「こんなに早く決まるもんなのか」

「まあ、轟と引き分けた奴だかなー」

「ああ!? 半分野郎がもう一人増えんのかよオイ!!」

「か、かつちゃん。お、女の子だから野郎じゃないよ」

「んな事分かつてるわボケエ!!」

「ははは、元気な人達だね。」

「はいお前ら静かにしろ。編入に関してはこいつに職場体験の指名が来てたのと、十分実力があると俺が判断したからとつと編入させた。あんま遅いと単位の補填が追いつかなくなるしな」

目を光らせ、しーんとさせてから相澤先生が話し始めた。

はい、そんな訳で私、取替葵は本日からヒーロー科一年A組に編入する事になったのです。この短時間で編入する影響で大量の書類を書かなきゃいけなかったから大変だった。

「取替、席は適当に用意しといたから座ってくれ。遅くなっちゃったがホームルームの続きだ今日の予定は——」

「今日からクラスメイトだな！ よろしく頼むぜ！」

「わー可愛い！ ねえねえ、美容とか気を遣ってる事ある？」

「連絡先交換しよーよ！」

「ケロ、仲良くしてくれると嬉しいわ」

「あはは、ありがとう。名前とかは全員覚えてきたから皆も私の名前覚えてくれると嬉しいな」

ホームルーム後、A組の人達は概ね好意的なよう皆それぞれ話しかけに来たけどそうでもない人もいるようで、

「オイ白黒女ア！ テメエ俺と今度戦え！ 体育祭でお前と戦つてねえ！」

爆豪くんはどうやら轟くんと準決勝で引き分けた私も倒して完全勝利を収めたいように目を釣り上げて声を上げている。決勝が不完全燃焼だった事もあるみたいだね。

「あ！ そうだ轟くん、試合の後倒れた私を保健室に連れてつてくれたの君なんだってね。試合の後で疲れたたろうにありがとね！」

「別に気にしなくて良い。……それより」

「それより？」

「……いや、何でもない」

何か言いたい事がありそうだったけど何だろう。人がいると話しにくい事かな。

「オイ！ 無視してんじゃねえぞ！」

「かつちゃん！ 初対面の人にその絡み方は良くないって」

「緑谷くん、別に良いよ。爆豪くんも今度授業でも何でも戦うから、それで良い？」

「……ああ」

私との戦いの約束を取り付けた爆豪くんは一先ず落ち着いたみたいで席に着いた。

ヒーロー科の授業は短い時間で一般科目を終わらせる為か多少スピーディーだったものの至って普通の授業で、普通科にいた私は特に苦労する事無く一日を終えた。

雄英はヒーロー科自体も高い偏差値を誇るけど特殊な科目が無い分普通科の方が基本勉強時間が長くて学力もそこそこ高いからね。

特殊な科目と言えばヒーロー基礎学の授業もあつたけど私はコスチュームが完成していないと報告をして見学をした。

「取替さんこの後暇？ 暇だったら色々聞きたい事とかあるし一緒にご飯行きたいんやけど」

「もちろんいいよ！ ちょっと出遅れてる分みんなと早く仲良くなりたいたいし！」

帰宅の用意をしていると麗日さんからご飯に誘われので当然オッケー。

メンバーは麗日さんに緑谷くん、梅雨ちゃん（そう呼んでと言われた）、八百万さん、

切島さんと私の六人。他にも来たいと言ってくれた人はいたけど店の都合を考えて他の人は後日わたくしという事になった。

「あの、私あまりこういつたお店に来た事が無いので色々お教え頂きたいのですが……」

「まあ取り敢えずドリンクバーは必須だろ？ 飯は……適当に好きなもん選べばいいだろ。ファミレスの飯でハズレなんてあんま無いしな」

「いや、甘いね切島くん。ファミレスでハンバーグ系統以外の選択肢は無いよ」

「何のこだわりだよ……」

ファミレスなんて大抵ハンバーグ売りにしてるんだから頼んであげるのが常識だと私思ふんだ。

「安いご飯安いご飯安いご飯……」

「う、麗日さん、ドリアとか安いしそれとかいいんじゃないかな？」

「私はもう決めたけど……何で震えているの緑谷ちゃん？」

「え、ああこれは学校でもやってたけど空気椅子でやっぱ僕に足りてないのは個性を扱う為の器であつてそれを鍛えるためにやってるんだけど単純な筋力アップだけじゃなくて体幹も鍛えられて「お願いだからやめてちょうだい」……ごめん」

「はは、緑谷くん達も決まった？ お腹空いちやつたしそろそろ頼んじゃおー！」

八百万さんと梅雨ちゃんは私が推しまくったハンバーグ（チーズのつてるやつ）を頼んで私も当然注文した。麗日さんはドリア、緑谷くんはカツ丼、切島くんはハンバーグとステーキを頼んだみたいだね。

「じゃあご飯来るまで皆から取替さんに質問してもいい？」

「もちろんいいよ！ ああ、あと葵でいいよ」

早いとこ仲良くなりたいし何でも来いっ！ って感じではあるけどやっぱヒーロー科の人は根明な人が多いよね。

「好きな食べ物は？」

「今食べてるハンバーグ！ って言いたいけどプリンが一番好きだね」

「葵ちゃんは何人家族なのかしら？」

「今は一人暮らしだけど家族としてはお父さんとお母さんがいるね」

「体育祭の時、個性を使い慣れてるご様子でしたが普段どのような事をされているのですか？」

「確かに取替さんは個性を上手く使ってたね。僕はまだまだ自分の個性を使えてないから参考になりたいな」

「まあそれは私が使い慣れてるのは他より個性発現が早かったってだけだから参考にはならないよ」

「綺麗な髪の色をしてるけど地毛なのかしら？」

「ん？ まあ地毛っちゃ地毛だねー。ちなみにどっちの色が好き？」

「そうね、私と同じ色の黒色がいいかしら」

「私も綺麗な黒だと思いますわ！」

「うちは色近いし白の方がいいかなあー」

「お前もヒーロー目指して編入して来たんだろ？ ならさお前にも憧れのヒーローの一

人や二人いんだろ？」

ちなみに俺は漢気ヒーロークリムゾンライオット紅頼雄斗だ！」

「あー！ それ僕も気になる！ 僕は勿論オールマイトだよ！」

尊敬するヒーロー、か。

「うーん……やっぱヒーローを目指してるのは家族の影響が大きかったかな！ 両親と

もヒーローやってたし」

「ほんとに!? なんてヒーロー名で活動してたの!？」

適当に取り繕った訳で当然あの人達のヒーロー名なんて知らないけどここで知らない

いのは不自然かな。

「じゃあクイズ形式にしよう！ ヒントはさっきの夫婦でヒーローをやっているっての

と、そうだね……二人とも異形系の個性を持つてるね」

「夫婦で異形系……これだけで結構絞れるな。」

取替さんくらいの子供がいる年齢のヒーローってことは結構なベテラン、他にも活動範囲とかから一番あり得そうなのは……分かった！ 王蛇とラクーンドッグだよね！

ニシキヘビと狸の個性の！」

「わお！ 流石ヒーローマニアだね！ 一瞬で当てられちゃったよ」

名前はいいまいちピンと来てないけど確かそんな感じの個性だった気がするから多分当たってそうだね。

「あれ？ でも確かあの二人って「お待たせしました」ああ、えと、ありがとうございませう」

「みんなのご飯も来たことだし食べ始めよっか！ 今度はみんなの話も聞きたいな」

ご飯を食べ始めてからはみんなから色々な話を聞いた。

緑谷くんの好きなオールマイトの解決した事件の話だったり、切島くと緑谷くんが筋トレ会談を始めたとか。

女子の方は今度は梅雨ちゃんが自分の家族の話をしてくれたり、麗日さんの節約術を聞いたかと思えば八百万さんの豪華絢爛な生活っぷりを嫌味無く聞かされたりって感じだった。

「んじゃ、今日は解散だな！ 明日からの職場体験みんな頑張ろうぜ！」

「うん！」

「勿論全力で取り組みますわ！」

「そうね。少しでも学んでお互い成長して会いましょ」

「うちもすっかり学んでくる！」

「そうだね、編入したばかりで不安だけど自分なりに頑張ってみるよ！」

明日から職場体験があるだけあって控えめな時間の解散にはなったけどそれなりに仲良くなれたみたいで良かった良かった。

コスチュームの方はすでに完成しているし、本当に職場体験が楽しみだね！

閑話 職場体験初日

「せいっ、やつ！」

「おっと、なかなか良い拳だけどまだまだだねっ！」

「わ！　っと痛たたた……もう少しくらい手加減してくれても良いんじゃないですか」
チエイサー「さん」

「ははは！　熱くなってちよつと本気になっちゃったよ！」

……もしかしてだけど、葵ちゃん喧嘩とかしよっちゃゆうしてたタイプ？　何だか最近

補導した不良学生と少し似たような動きだったんだけど」

「まさかあ！　そんな訳無いですよ！」

雄英高校ヒーロー科の職場体験初日、私はチエイサーのヒーロー事務所を訪れている。

彼の個性はGPS。触れた対象の位置情報を把握出来るようになるというもので主に逃走犯の追跡などを請け負っているヒーローだ。

「にしてもあの時手伝ってくれた子が来てくれて嬉しいよ。

僕はまだまだ若輩者のヒーローで、今も手伝ってくれる仲間がいなくてこんな事務所

も持っていないぐらいだから本当に君みたいな有望なヒーローの卵が来てくれて嬉しいよ」

手伝った、というのは体育祭前のあたりでイノシシの個性を持ったやつを捕まえるの手伝った事らしい。

どうやら彼は私の体育祭での活躍を見て以前私が個性を使って助けた事に気づいたらしく、こうしてお礼ついで指名を出したみたい。

それと、彼の言う仲間というのは彼と一緒に事務所を立ち上げたヒーロー達の事で、チェイサーというヒーローを中心にしているものこの事務所ではサイドキックではない対等の立場でみんな所属している。

「私の方こそありがたいですよ。忙しいのに近接戦闘を教えてくださいただで」
「未来ある後輩の為に先輩は手助けをしてやりたいのさ。まあ、仕事の合間しか出来ないけどね。」

さ、今からいつものパトロールに入るからついて来て！」

「はいっ！」

きびきびとした動きで外に向かったチェイサーさんの後についていく。

ちなみに私のヒーローコスチュームはそれなりの量の小型ナイフと対応するホルダー、小さめの石を大量に入れたポーチを装備したもので、外見は装備を隠すためのぶ

かぶかの黒コートに顔の右側を覆う仮面が付いている。

後は他にも色々仕掛けがある。

ちよつと男っぽいとか厨二っぽいけど気にしない。

「うーん、右側の仮面は外しちやおうか！ ヒーローってのは自信満々に顔を見せて歩くのが大事なんだよ！」

子供から見れば僕みたいな地味なヒーローでもコスチュームを着て街を歩いていれば他のヒーローと変わりなくカッコ良い存在だからね！」

「えと、はい分かりました」

右側の仮面を取り外して街の巡回をする。

自分の住んでいる街だから歩き慣れてはいるけど流星にいつものように気楽には歩けない。

チエイサーさんはどうやらここらでは慕われている立派なヒーローらしく街を歩いているだけで沢山の人に声をかけられる。それは私も例外ではなく色んな人に体育祭の事を沢山言われる。

「体育祭観てたぞ！ 大したもんしゃねえか！ ヒーロー名は何て言うんだ？」

「あはは、まだ決めて無いんですよねー」

「わあーかわいい！ チエイサーのおよめさん？」

「うーん、お嫁さんでは無いかない！ チェイサーさんのところでお勉強をしてるんだよ」
「頑張ってるー！」

「ありがとうございまーす！」

普段自分が住んでいる街の筈なのにコスチュームを着てプロの隣に立っていると見えて来るものが大きく違う気がする。

私達に話しかける人達はみんな自然な笑顔を浮かべて話しかけて来る。

巷を騒がせているヒーロー殺しの活動圏でないにせよここまで街の人達が笑っているのは良い事……なんだと思う。

「そう言えば、自己紹介の時に私がどんなヒーローになりたいかを話したじゃないですか。逆にチェイサーさんがどんなヒーローでありたいのか聴きたいんですが良いですか？」

パトロールが終わり事務所に帰る途中、話しかけられる事も減ってきたので気になっていた事を聞いてみる。

学校にもプロの先生はいるけど実際にこうして事務所を構えている人の話を聞いてみたいと思っていた。

「ん？ ああ、”どんなヒーローでありたいか”ね。そりゃあ勿論平和の象徴だよ！」

「へ、平和の象徴？」

「まあ、平和の象徴といってもオールマイトみたいのじゃなくてこの街の平和の象徴って意味だけどね」

「あの、チェイサーさんは十分街の人達に慕われていると思うんですけど……」

今日一日一緒にパトロールをして彼がどれほど街の人達に好かれてるかなんて簡単に分かるし、高校を卒業してそれ程経っていないのにここまで事務所を大きくしたのは本当に凄いと思う。

「僕達もこの街の人達をある程度守れているとは思っているけどあくまである程度なんだ。全てじゃない。」

この街の人達に平和の象徴は誰かって聞いたらほぼ全員がオールマイトって答えると思う。

そりゃあ勿論オールマイトは全国各地に飛び回って事件を解決出来るかもしれないけどさ。それでも！ この街のヒーローは僕達なんだ。このままだとなんかオールマイトだけに頼ってるみたいで恥ずかしいじゃん？」

「そう、ですか……本当に、本当に凄いなと思います。私も参考にしたいぐらいです」

……ああ、本当に、本当にどこもかしこも眩しくて堪らない。

A組の人達と会話をした時にも思ったけど、やっぱり私の周りには本当に眩しい人達でいっぱいだ。

それこそ花と同じような雰囲気をみんながもっている。それが、どうしてもここには花がいるべきだったと思わせてくる。

「まあ少しカツコつけてみようとしたけど、こうして僕が立派にヒーローやれてるのは仲間、いや友達のおかげでもあるからさ。」

君も何でも気軽に話せる友達に大事なしなよ?」

「何でも気軽に話せる友達……はい、友達は大事にしたいと思います!」

借り物の光を身につける私が真に光を放つ彼等の上に行くにはどうしても力を手に入れなければならぬ。

私のように人との協力が欠かせない個性なら尚更、友達というものは大事な筈。

「そう言えば葵ちゃん。君、家近いまいたけど事務所に泊まってくつて事いいの?」
「はい! 別に自分の家じゃなきゃ眠れない訳でも無いです。それに、事務所にいればチエイサーさんから指導して貰えないかな……なんて思ってたりますんですけど……」

「あはは、別に構わないよ。明日の邪魔にならない程度なら幾らでも。」

それにこの事務所には他にもヒーローがいるからね。彼等からもアドバイスを貰うと良いよ」

「やった! ありがとうございます! 先輩!」

「っ!? はは、高校卒業してあんま時間経ってないけどやっぱり女子高生からそう呼ばれるとなんか照れ臭いね」

「あはは! そう言うと思って呼んでみました!」

私の初めてのヒーロー見習いとしての活動初日は何事も無く、だけれど私の中の何かに大きな影響を与えた気がする。

ヒーロー殺し

「死柄木、死柄木いー、ねえねえ聞いてよー！」

「嫌だ、お前に付き合う暇は無い。大体こっちは怪我してんだよ。お前の下らない話で苛立つて傷口が開いたらどうすんだ」

先日の雄英襲撃で名を馳せたヴィラン連合、その拠点でもあるバーにて連合のトップである死柄木弔と、白い少女がカウンターに肩を並べて座っている。

先程ヒーロー殺しと一悶着あり苛ついている死柄木とは対照的に少女はニコニコと笑みを浮かべ、

「あのね！ 今日ペットショップに行ったんだけどさー」

「おい、何で話始めてんだよ」

「ハムスターを買おうと思ったんだけどね、なんとまあ驚いた事にハムスターの値段よりケージとか諸々の値段の方が高いんだよ！ ね、おかしいでしょ？」

死柄木の言葉など聞いてないかのように話し始める。

「はあ……、数が多いとか何とかでレア度が低いから安いんだろ。一々そんな事で話しかけてくるな」

「ちよちよ、ちよつと待つてよー！ 話はここからなんだからね」

さつさと話を切ろうとする死柄木に焦ったのか少女は死柄木の手を掴み、彼女は話を続ける。

「そう、ゲームとかだとレア度が高ければ高い程価値があるじゃん？ 逆に低ければ低い程価値が無い。

これと同じように現実でもハムスターとかの命にもレア度が付けられてるわけ。だつたらさ、世界に何十億といるコレの命の価値、レア度は一体どんなもんならうね」

最後の言葉とともに少女は後ろに隠し持っていたモノを死柄木の手の平に乗せ、笑顔を見せる。

「おい、俺の個性はお前の為のゴミ箱じゃねえって何度言えば分かんた？」

「あはは！ まあ許してよ。ちゃんと仕事はするからさ。」

「……それに一応期待してるんだよ？ 君が面白いものをみせてくれるのを」

「……だつたら早くそれをやめろよ」

「ん？ ああ、あんまりこのままだと良くないよねー！ ……ふうつ、じゃ、今日も頑張つて働いて来てやるよ。黒霧、送つてくれ」

「分かりました」

長身の男の声に反応して黒霧が作り出したゲートに席から立ち上がった長身の男が消えて行く。

「おい黒霧、先生と通話を繋げ。少し遅れちまったがさつさとあの草の根運動に乗っからせてもらおう……あと床掃除しとけ」

「あ、そうだ。今日はちよつとだけ遠出する予定があるよ」

「はあ……はあ……遠出する予定、ですか？」

職場体験三日目、パトロール前の早朝訓練の最中にチェイサーさんが話し始める。

「うん。僕の仲間が追ってたヴィランに逃げられてね。」

用意してた発信器を付けたらしいから場所は分かっているし、注意するような個性でもないから勉強の為に葵ちゃんも連れてこうと思つて」

「是非！ つて言いたいんですけど多分結構遠くに逃げてますよね？ だったら近くのヒーロー事務所に連絡した方が早く捕まえられるんじゃない？」

一応ヒーロー事務所ごとに管轄するエリアがあるもののエリア外での活動で罰せら

れる事は無いはず。あんまり多いと白い目で見られると思うけど……

ただ、こういう場合って大体近くのヒーロー事務所に任せられた方が早く解決出来るし、面倒事にもならないと思うんだよねー。

「そうしようとはしたんだけどねー。頭が回るのか回らないのか知らないけどそのヴィラン、保須に逃げたらしくてね。

ヒーロー殺しのせいでいっぱいヒーローはいるんだけど何処も彼処もそれに付きつきりみたいで取り合ってもらえなかつたんだよ」

「だから自分達で行くって訳なんですネ」
「そう、僕以外にも何人かは連れてくし、流星に戦わせたりはしないか

らある程度の安全は確保出来ると思うよ」
「分かりました！ 足手纏いにはならないようにしますね」

うーん、保須、保須かぁ。

確か飯田くんの職場体験先だよな。噂だとお兄さんが襲われたんだとか。

体育祭以降クラスに入ってからあんまり話せてなかった、というか話しくなかったんだよな。もし会えたらちよつと話そうかな。

「あ、そうだ、今回保須市で活動するに当たって絶対に路地裏とか通っちゃダメだよ。

ニュースではヒーロー殺しにはプロヒーローしか襲われないだとか言ってるけど、ど

んな思想を持ってようが相手は人殺しのヴィランだからね。何がきっかけで襲われるか分からない」

「分かりました！」

「うん！ いい返事だ！ じゃあ、行こうか！」

「思ったより……簡単に終わっちゃいましたね」

「うん、いやまあ、そこまでの犯罪者じゃなかったけど……思ってたより呆気なかったね」

昼間に保須に着いてから真っ直ぐ発信器を頼りに向かったところ、呑気に歩いている件のヴィランを発見、即確保という味気ない結果。

持っていた個性も単純な身体強化系で、それすらも大して能力が上がっているようにも見えないレベルのものだったね。

後、ちよつとだけ、すこし誤算だったのは思つてた以上に遠くに逃げていたから時間が掛かつてしまつていて夜になる、という事くらいか。

「うーん、もう今日の仕事は終わりだろうし他の皆も集めてご飯にでも行こうか……っ!? 葵ちゃん! 悪いけどここから出来る限り離れて貰える!? ヴイランが来てるから出来るだけあの煙から遠のくように市民の方に呼びかけて貰えると助かる! あといつでも連絡取れるように通話したままにしといて!」

「えつと、はい! 分かりました……つて、うえつ!? なんじゃありや!? 何か変なの飛んでる!」

仕事が終わつてのんびり歩いてる途中、街から出てる煙と、空を飛んでる化け物に気づいたチエイサーさんが即座に私の指示をだしてくれる。

「皆さん! 出来る限り落ち着いて、速やかに避難をお願いします! 安心してください! 現在、保須市には市外からのヒーローも来てます! 安心して避難をしてください!」

近くで演説をしていた人のメガホンを自分のバッグと入れ替え、避難勧告を続ける。あらかた避難させ終えたら次の場所に向かう為にポケットから小さい石ころを取り出して準備をする。

「あーら、よ、つとー!」

石ころを投げて自分と入れ替える。

同じように定期的に個性を発動する事である程度の高度を保ちながらビルの上を飛び回る。

「……被害がそこそこあるだけあつて複数のヴィランが活動してるみたいだな。ただ、対処可能な数のヒーローがいるだろうし私のすべき事は……っ!? あれは……」

避難誘導を進める為にビルの上を越えてただけど、念のため路地裏も確認してたら見ちゃったよ。見覚えのある人影を。

「ぐっ……!!がああっ!!」

「ハア……弱い、弱いな。お前も、その兄も。」

「何故か分かるか? 偏にお前らが贖物だからだ。英雄を気取るには何もかもが足りていない」

「黙れ悪党……!! お前の、お前のせいだ! 兄さんはヒーロー活動が適わなくなった

!!

お前が巫山戯た理由で潰したヒーローは！ 多くの人を助け、導き、僕に夢を抱かせてくれた立派なヒーローだったんだ!!

殺してやる!!!」

「ハア……あいつをまず助けろよ。」

他を救う前に憎しみを晴らす事で自分を救おうとする。ヒーロー失格だ。だから死……っ!?!」

「悪いね、ヒーロー殺し。お前なんかには私の友達を殺させないよ」

「っ……!!? 取替くん……どうしてここに!?!」

ふう、どうやら間に合ったみたいだね。

それにしてもヒーロー殺しか。私のデビュー戦がとんでもない大物になっちゃったね。

「ハア……また子供……一応聞いておくが何者だ」

「勿論、ヒーローだよ。それと、何だっけ？ まずあいつを助けろよ、とか言ってたけど

……あいつってどこにいるのかなー?」

「何を巫山戯た事を……っ!?!」

確認の為に後ろを向いたヒーロー殺しにナイフを投げつける。

ヒーローは基本的に殺しは推奨されていない上に私みたいな学生には刃のついた物は持たせてもらえないけど、これで十分！

ちなみにそこから辺で倒れてたヒーローはビルの上に避難させといた。

「っ!? 消えた! どこにい、ぐうっ!?」

「うっし! 決まった!」

ヒーロー殺しがナイフを避け、あいつの後ろにまわったら個性を発動、後ろをとって相手の首を足で挟んで地面に叩きつける。

叩きつけた後はいったん距離をとって飯田くんのところへ行く。

「飯田くん! 大丈夫!? 動けないなら私が安全なところまで……!」

「取替くん、手を……出さないでくれ。君には関係ないだろ!!」

「……ヴィランに家族が襲われたんでしょ。分かるよ。でもね、ヴィランに家族が殺されようどうしようも無いような人はいっぱいいるよ。」

君も、動けないんなら私に任せな。友達だから助けてあげるからさ。」

「っ!? 僕は、僕はっ……!」

さて、と、頭を強めに打ちつけたけど……多分ピンピンしてるね。

本当は追撃を加えたかったところだけど相手の個性がイマイチ判ってないから下手

に攻めると危険だね。

私自身の個性に攻撃力は無いから一撃必殺とか短期決着とはいかないしなあ。

「ナイフを複数投げる事でどれか一つでも俺の後ろに行かせ、自分の個性で背後を取る……か。後の動きも俺を確実に仕留めようとする動きだった。

……お前は生かす価値がある。お荷物が無ければ俺を拘束出来たかもな」

「ハッ！ 舌が長いだけあってよく喋るね。生かす価値があるとか無いとか、お前、何様のつもりでいるのかな？」

「ハア……俺にはそいつらを殺す義務がある。ぶつかり合えば弱い方が淘汰されるが……どうする」

「っ!？」

……落ち着け私、相手はまだ理解が出来る暴力だ。

あの日見た理解不能な、理不尽な暴力じゃない。それに、彼女がこんなところで臆する訳が無い。

「何だっ正しいよ私は。目の前にいるもの全てを救うヒーローになるんだ！ 友達一人救えないでどうする！」

「斬りつけられたらダメだ！ 取替くん！」

「お前は……良いな」

斬りつけられたらダメ、ね。だったら先ずは、

「武器を取るのが先、かな」

残念ながら相手の刀に近いサイズの物で武器にならなそうな物が無かったから、近くに落ちていた鉄パイプとヒーロー殺しの刀を入れ替える。

武器には変わらないけど斬られたらダメ、という事は出血するなという意味だろうか。相手の脅威を少しだけだけ減らせた……と思う。

「ハア……刀が鉄パイプに……厄介な個性だな。少し、本気を出すとしよう」

「速いっ!! くっっ!」

投げナイフ!? あいつ私と同じようにナイフを隠してたのか!? いや、それよりも近づかれてるのが不味い!?

先程までとは段違いのスピードで接近してきたヒーロー殺しは私の右側に回り込んで、身を屈めてさつき出血した私の太腿を舐めようと……ん?

「お、ま、え、は! 巫山戯てんのか!?!」

身を屈め、舌を出したまま変態ムーブで私の太腿を舐めようとしてきたので取り敢えず変態と位置を入れ替えて逃げる。

「飯田くん! 取替さん! 助けに「おい変態! いくら私が可愛いJKだからって太

腿舐めようとしてくるなんてどうかしてんだろ!?!」……え?」